

## 5歳児を対象とした「友達との関係」に関する聞き取り調査

—個人・グループ・学級全体を幼児はどのように捉えているか—

Interview Investigation on “Relationships with Friends” for 5 years-old Children  
—How do Children grasp about Individual, Group, Whole Class

松延 愛美\* 金子 亜由美\* 小谷 宜路\*  
Aimi MATSUNOBU Ayumi KANEKO Takanori KOTANI

### I 問題と目的

#### 1 保育内容としての「人間関係」

我が国の幼児教育では、人とのかかわりが重視されてきた歴史があるが、それを保育内容としてナショナルカリキュラムの中に位置づけたのは、戦後である。昭和31年の幼稚園教育要領において、領域「社会」の中に友達との関係が示されたのち、昭和39年の改訂では、人とのかかわりに関する記述が増加した。さらに、平成元年の改訂によって、5領域の 一つに「人間関係」が設けられ、「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う」領域とされた<sup>1)</sup>。領域の内容には「先生や友達と共に過ごす」「友達と積極的にかかわりながら」「友達よさに気づき」「友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし」「友達とのかかわりを深め」と、友達とのかかわりに関する記述が複数含まれている。また平成20年の改訂では、従来の記述に加え、教師や友達に認められる体験を通じて自信をもつことや、協同して遊ぶことの必要性が新たに挙げられている<sup>2)</sup>。このように、数十年かけて、人とのかかわり、特に友達とのかかわりを重要な保育内容として定着させてきたことが窺える。

幼児の友達とのかかわりに関する研究に目を向けると、幼稚園における自然観察から、仲間関係の変化やそこの保育者の援助について分析した研究が多くなされている<sup>3)</sup>。ただこれらは、心理学の研究対象として分析されることが主であり、保育内容としての「人間関係」に関する研究が十分であるとは言えない<sup>4)</sup>。今後、保育の実践を踏まえた具体的な保育内容を検討し、特に幼児の「友達」との関係について、研究を深める必要がある。

#### 2 幼児の「友達との関係」：個人・グループ・学級全体の関連性

領域「人間関係」では、「友達」という表記が多くされているが、幼稚園教育要領は、元来、大綱化されたものであり、実際の保育内容として「人間関係」を考える際

には、年齢や時期により、「友達」とはどのような関係を指すものかを明確にしていかなければならない。具体的に言えば、一人の相手、数人のグループ、大勢のグループ、学級など、様々な関係が挙げられよう。幼稚園教育要領では、幼児教育の指導の特性として「幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導」<sup>5)</sup>を挙げている。これは個別活動だけを重視することではなく「個人、グループ、学級全体などで多様に展開される」<sup>6)</sup>活動の中で個人が充実することを目指すものである。

ところで、「個人、グループ、学級全体」の関連について、我が国の幼児教育理論の確立に貢献した倉橋は「個・分団・組」として、次のように述べている。組全体を基にして、組では大き過ぎるから分団(グループ)に分け、さらに分団から個を取り出すという考え方ではなく、幼児の生活は個から分団へ、分団から組へという順序こそが、本当である<sup>7)</sup>。一方、戦後の幼児教育の実践と研究に尽力した大場は、園生活とは、幼児一人一人の結びつきがなくばらばらな状態(群れ)から、経験を積み重ねることによって集団らしくなっていく過程のことであり、園生活は「集団生活」ではなく「集団化の生活」であるとしている<sup>8)</sup>。これは、先の倉橋の考え方と致するものであろう。さらに大場は、集団を、個々の欲求に基づく集団(遊びの仲間の結びつきなど)と要請に基づく集団(学級や保育者の考えでメンバーを決めたグループなど)に分類し、学級集団を育てるということは、要請に基づく集団の状態を、欲求に基づく集団の状態のように変化させることであると述べている<sup>9)</sup>。

#### 3 幼児教育における学級の適正人数の問題

「個人」は一人を指すことは自明であり、「グループ」もその時々状況によって人数の多少があることも想定できる。一方「学級全体」とは、各園の実情によってそこに含まれる幼児数は、大きく異なっている。例えば、ある園では10人に満たない幼児の集団が「学級全体」であり、別の園では35人が「学級全体」となり、どちらの

\* 埼玉大学教育学部附属幼稚園

場合も、同じ「学級全体」と言い表されるのである。保育を実際に展開していく際には、指導計画の作成やその評価を行うが、保育の過程を通して、学級全体を一つの単位とすることを基本としている。しかし、同じ人数の活動が見られた場合であっても、「学級全体」の人数によって、記述の方法や保育そのものの考え方が変わってくる。例えば、幼稚園教育要領の領域「人間関係」における内容「(8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。」を考えた場合、20人が活動する中で共通の目的を見だしていたとする。このとき、20人の学級では「学級全体」で目的を共有したことになるが、35人の学級では「グループ」で共有したことになる。この例だけでなく、領域「人間関係」には、友達とのかかわりに関する保育内容が複数位置づけられている。個人・グループ・学級全体など多様な活動を通して、それらを実現していくわけだが、「学級全体」の人数が、保育の展開の仕方に大きく影響することを認識しておかねばならない。

幼稚園の学級の人数はどのくらいが適正であるかについては、長年議論されている問題である。その歴史を遡ると、明治32年の幼稚園保育及設備規程において、保姆一人に対する幼児数が40人以内と初めて規定されたのち、各法令によって約100年間、この40人という基準が継承されてきた<sup>10)</sup>。ようやく平成7年に幼稚園設置基準が改正され、学級の幼児数は、35人以下が原則となり<sup>11)</sup>、現在、30人以下へと引き下げる方向も打ち出されている。この間、幼稚園の学級定員についての研究がすすめられ、具体的な適正人数もそれぞれの中で示されている<sup>12)</sup>。いずれの論においても、現行基準の35人よりも少ない人数が適正であると示されている。また世界的な幼児教育施策の動向と比較しても、日本の基準は、幼児期の学級集団として、かなり多人数である<sup>13)</sup>。

以上述べてきた問題をふまえ、本稿では、幼稚園に在籍する幼児を対象として、学級内の友達との関係に関する聞き取り調査を行い、幼児自身がグループや学級全体をどのように捉えているのかを明らかにすることを目的とする。調査の結果は、日々の保育の中で保育者が捉えている幼児同士の関係性や保育の展開など、実際の保育実践に基づいて、保育者自身が考察する。そのことにより、保育内容としての「人間関係」に関する新たな手がかりを得たいと考える。

## II 方法

### 1 調査対象児

埼玉県内の国立幼稚園5歳児 計71名である。内訳は、以下の通りである。なお、当該園は3、4、5歳児学級ともに単学級であり、在籍期間中にクラス替えはない。

・2008年度 1学級35名 [以下、I組とする]

(内訳：男児18・女児17／3年保育19・2年保育16)

・2009年度 1学級36名 [以下、II組とする]

(内訳：男児18・女児18／3年保育20・2年保育16)

## 2 調査方法

2008年度は、09年1～3月の13日間、09年度は10年1～3月の6日間に聞き取り調査を実施した。幼稚園修了間際に調査を行うことで、幼稚園の教育期間全体を通じた友達との関係を把握できると捉え、調査時期を設定した。

5歳児保育室の一角に用意した机席に幼児を1名ずつ呼び、次の手順で質問をした。学級に在籍する全幼児の顔写真を一人一枚のカード(4×5cm)にし、自分と仲の良い友達(仲良し)は誰かを挙げてもらい(複数選択可)、その理由を尋ねた。次に、それ以外の幼児について、写真カードを仲良しだと思うグループごとに集めてもらい、理由についても尋ねた。友達関係を知らない・わからないという幼児の写真カードはそのままにし、調査者が記録しておいた。調査は、4歳児学級時に担任又は非常勤教諭として対象児を保育した各年度1名が行った。その理由は、5歳児担任が調査を行った場合、他の多くの幼児が集まり調査がうまくすすまないことが予想されたためである。また、幼児と調査者との関係が築かれていることで、より詳細な聞き取りを行うことができることも考慮した。

結果の整理とその分析に考察については、筆者3名が協議しながら行った。2名は各年度の調査者であり、1名は5歳児学級担任(両年度とも)である。

## III 結果と考察

### 1 調査対象児全体の傾向分析

#### (1) 「仲の良い友達」と捉えるグループの人数

調査の冒頭に、自分と仲の良い友達、いつも一緒に遊ぶ仲良しは誰か尋ねた。表1はその平均人数である。対象児71名の平均は「4.7人」であり、自分自身を含めると、約6名のグループを、仲の良い友達と捉えていることがわかった。また、男女別それぞれの平均は、男児「4.5人」、女児「5.0人」であり、大きな違いはなかった。また、最も少ない人数は、男女児ともに「2人」であった。

平均としては、「4.7人」が仲の良い友達に挙げられた人数であったが、個々の結果には違いがあり、その分布を示したのが表2である。表1に示した平均値において、I組「3.7人」、II組「5.7人」と、I組よりもII組のほうが多くの人数を仲の良い友達としているが、分布を見ても、学級による傾向の違いが見られた。I組では学級の半数(18名)が「2～3人」を仲の良い友達と捉えているのに対し、II組では「4～5人」を挙げた幼児が半数近く(13名)であった。またII組では、「10人以上」を仲の良い友達と挙げた幼児が4名おり、最多値は、男児・女児それぞれ「13人」「14人」であった(I組の最多値は男児「7人」女児「6人」)。

表1 仲の良い友達に挙げた人数（平均値：人）

	I組	II組	計
男	3.9	5.0	4.5
女	3.5	6.4	5.0
計	3.7	5.7	4.7

表2 学級・男女別の分布

		2～3人	4～5	6～7	8～9	10人～
I組	男	8	8	2	0	0
	女	10	5	2	0	0
	計	18	13	4	0	0
II組	男	4	9	3	1	1
	女	4	4	5	2	3
	計	8	13	8	3	4

## (2) 「仲の良い友達」と捉えた幼児間の一致の程度

それぞれの幼児が挙げた「仲の良い友達」について、相手の幼児も同じように「仲の良い友達」に挙げているかどうか、その一致の程度をまとめたものが表3である。対象児71名の平均は「60.1%」であり、男児「63.7%」女児「56.4%」と、男児のほうがやや一致の程度が高かった。

ここでも、個々の結果に違いが見られたので、その分布を表4に整理した。「仲の良い友達」に挙げた人数は、最も少ない幼児で2人、最も多い幼児で14人と開きがあったので（表2参照）、分布については%で表すのではなく、自分が友達に挙げた数と相手も自分を挙げた数との差で示した。例えば、表4の中で「0人」となっている幼児は、自分が友達に挙げた相手全員が、自分のことを仲の良い友達と挙げている幼児である。

表3 「仲の良い友達」の一致度（平均値：%）

	I組	II組	計
男	71.8	55.6	63.7
女	69.5	44.0	56.4
計	70.8	49.0	60.1

表4 学級・男女別の分布

(自分が友達に挙げた数－相手も自分を挙げた数の差)

		0人	1～2人	3～4人	5人～
I組	男	4	14	0	0
	女	7	8	2	0
	計	11	22	2	0
II組	男	3	9	4	2
	女	4	4	5	5
	計	7	13	9	7

分布の仕方は学級別に違いが見られた。I組では、「0人」が11名、「1～2人」が22名と、学級内の分布にばらつきがなく、概して一致の程度が高かった。それに対してII組では、「0人」の幼児が7名いる方で、「3～4人」

が9名、「5人以上」が7名と、一致しない人数が多い結果の幼児も見られた。この結果と表2にも示した「仲の良い友達」に挙げた人数の個別の結果を照らしてみると、仲の良い友達に8人以上を挙げた幼児（7名）と、表4の分布で「5人以上」であった幼児（7名）は、全員同じ幼児である。多くの幼児を仲の良い友達に挙げる中で、そのうちの何人かは相手も自分を友達に挙げるが、挙がらない場合も多くなりやすいと推察できる。

## (3) 学級全体の友達のうち、その関係についてわからない・知らない人数

調査では、自分の仲の良い友達の他、学級内の幼児同士がどのような友達関係にあるかを聞き取った。最終的に、どのような関係にあるのかわからない・知らないという幼児がいる場合もあった。表5は、その平均人数であり、対象児71名の平均は「5.3人」であった。男女別では、男児「8.1人」女児「2.4人」であり、女児のほうが学級内の幼児の関係をよく把握していることがわかった。特に、学級別の分布（表6参照）では、II組の女児のほぼ全員が、わからない・知らない人数は「0人」という結果であり、自分と仲の良い友達以外の関係についても十分把握していた。

方で、「10人以上」について関係がわからない・知らないとした幼児が、71名中17名（I組12名、II組5名）いた（表6参照）。そのうち、1学級の半数である「18人以上」についてわからない・知らない幼児が7名であった。

II組の女児では、ほとんどの幼児が「0人」という結果であったが、I組の男女児・II組の男児では、「0人」から「10人以上」まで、個別の結果にばらつきが見られた。このことから、同じ学級で生活していても学級全体のいろいろな友達同士の関係に目が向く幼児と、自分とその仲の良いグループやその周辺までしか目が向かない幼児がいることが窺える。

表5 関係がわからないと挙げた人数（平均値：人）

	I組	II組	計
男	9.7	6.6	8.1
女	4.8	0.1	2.4
計	7.3	3.3	5.3

表6 学級・男女別の分布

		0人	1～5人	6～10人	10人～
I組	男	4	1	4	9
	女	5	7	2	3
	計	9	8	6	12
II組	男	6	4	3	5
	女	17	1	0	0
	計	23	5	3	5

## 2 抽出児に関する事例検討

ここまでの結果及び考察でもふれたように、「友達との関係」に関する幼児の捉え方は、全体の傾向はあるものの、個々によって多様であった。ここからは、3つの事例について、日常生活での読みとりと併せて検討する。1事例について2名の抽出児を比較しながら、考察を加えた。各事例2名、計6名の抽出児が捉えた「友達との関係」は、図1～図6に示している。図中の言葉は、聞き取り調査で実際に抽出児が発した言葉である。また、個人名については、便宜上、学級、男女別に、月齢順に下記のように表記した。

I組： 男児 A～R 女児 ㉠～㉡

II組： 男児 a～r 女児 ㉢～㉣

### (1) 事例1：他のグループへの関心の違い

#### －「仲の良い友達」の関係が一致している幼児－

F児とI児の聞き取り調査の結果を見ると、「仲の良い友達」に挙げた幼児が、ほぼ共通しており、両者も互いに「仲の良い友達」と感じている。両者を含めて、数人の一緒に遊んでいる友達との繋がりは強いことが現れている。F児は8月生まれ、I児は9月生まれと月齢も近い。日常生活場面では、共に、身体を動かして遊ぶ様子があり、登園後に身支度を済ませると、すぐに園庭へ向かう活発さが見られた。また、友達や教師の話をよく聞いたり、よく考えて活動しようとしたりする面が共通して見られた。

しかしながら、聞き取り調査の結果に大きな違いが出

たのは、学級内の他のグループへの関心においてである。F児は、「仲の良い友達」に挙げた幼児だけでなく、他の学級全員の関係を把握しており、それぞれの幼児が何をして遊んでいるのか、概ね捉えられていた。また、「入れてって、言って、遊ぶと楽しい」「前に遊んだけど、楽しくなかった」「一緒に遊ぶときもあるよ」など、F児自身なりに、それぞれの幼児との関係をどのように捉えているかを理解している言葉も聞かれた。日常生活の中では、F児が体を動かす遊びをするだけでなく、ぬいぐるみを用いた人形劇ごっこや動物園ごっこなどの遊びにも加わって過ごす姿も頻繁に見られた。それらの遊びの仲間に加わることも楽しいと感じていたことが窺える。

反対にI児は、「仲の良い友達」以外の他の幼児について、その関係を知っているか尋ねると、「えっ、全然知らない」「周り、見てないから」と本当に驚いた表情であった。どうにか、思い出すように5つのグループを挙げたが、何をしているかまでは把握していない様子だった。また、学級の半数以上（19人）については、どのような関係であるかわからないとのことであった。日常生活の中では、I児自身が「仲の良い友達」と捉えている幼児とのかかわりはとても多かったが、その他の幼児と積極的にかかわる姿は、あまり見られなかった。I児にとって、興味の合う好きな友達と遊ぶことが、楽しさを感じる大事な要素であり、その他に周りで展開している遊びや、そこでの幼児同士の関係については、あまり興味を抱くことが無かったことが推察される。

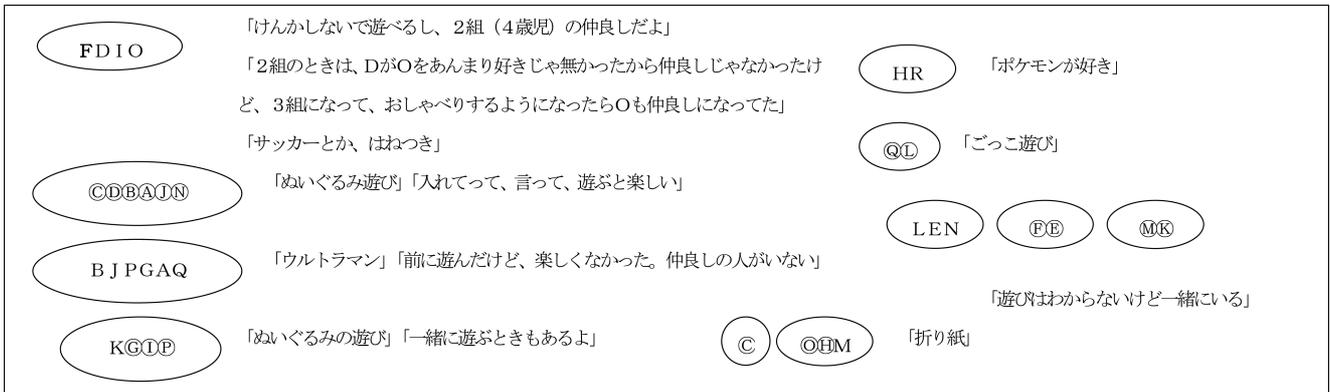


図1 抽出児Fの捉えた「友達との関係」

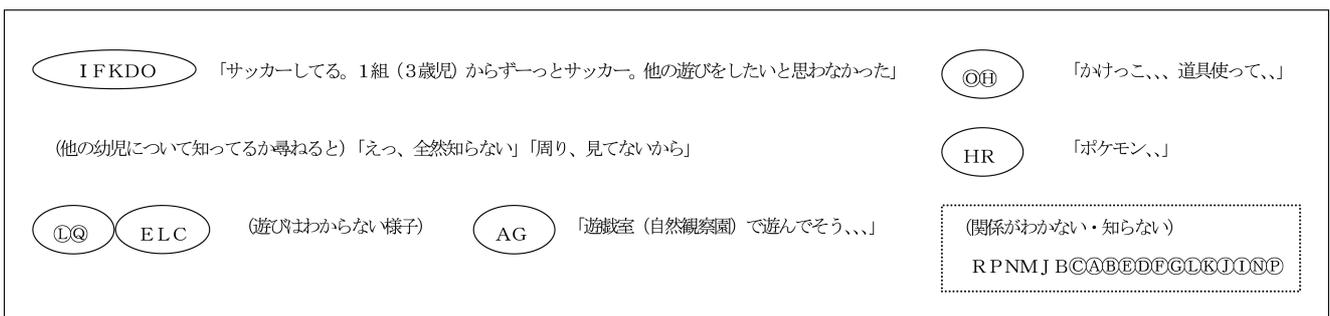


図2 抽出児Iの捉えた「友達との関係」

(2) 事例2：「仲の良い友達」の捉え方の違い

－仲の良い友達10人以上で一致の程度が低い幼児－

④児と⑩児の聞き取り調査では、両者ともに「仲の良い友達」として10人以上の大人数を挙げている（④13人、⑩11人）。また、仲の良い友達に挙げた相手も、自分のことを挙げているかという 致の程度は、両者とも低かった（④13人中3人、⑩11人中1人）。

両者とも3年保育児であり、日常生活の中では、大勢で過ごすことには控えめで、少人数でじっくり遊ぶことが中心であった。群れて遊ぶという姿はあまり見られなかったが、周りの友達の遊んでいる様子に目を配って、楽しそうな遊びはないかよく見て過ごしている姿は、両者に共通して見られた。

このように、聞き取り調査の結果と日常生活の基本的な傾向は、両者に共通した点が多い。ただ、さらに詳細な考察をすると、「仲の良い友達」の捉え方に違いがあることが見えてきた。

まず④児は、13人が仲の良い友達と挙げているが、それぞれ、さらに誰と誰の結びつきが強いかを捉えている。また、自分以外にも別の仲の良い友達がいる場合があることや、その関係がどのような結びつき方であるかについても認識している。自分が仲良くしている 人 人について、他の幼児との複雑な関係性があることを、具体的な場面や状況をふまえながら、詳しく答えている。単純に学級全体の幼児をいくつかのグループにわけて捉えているのではなく、分析的にとらえていることが窺える。

⑩児は、仲の良い友達として11人を挙げているが、自分がしたい遊びによって友達が異なっている。それぞれの遊びを 緒にする友達として、別個に11人が挙げたことが読みとれる。聞き取り調査では、調査対象としたほとんどの幼児が、「仲の良い友達」は 一つのまとまったグループとして捉えていた。 方で④児は、ある 一つの遊びの中でのかかわりとなっているために、「仲の良い友達」の 致の程度が低かったものと考えられる。

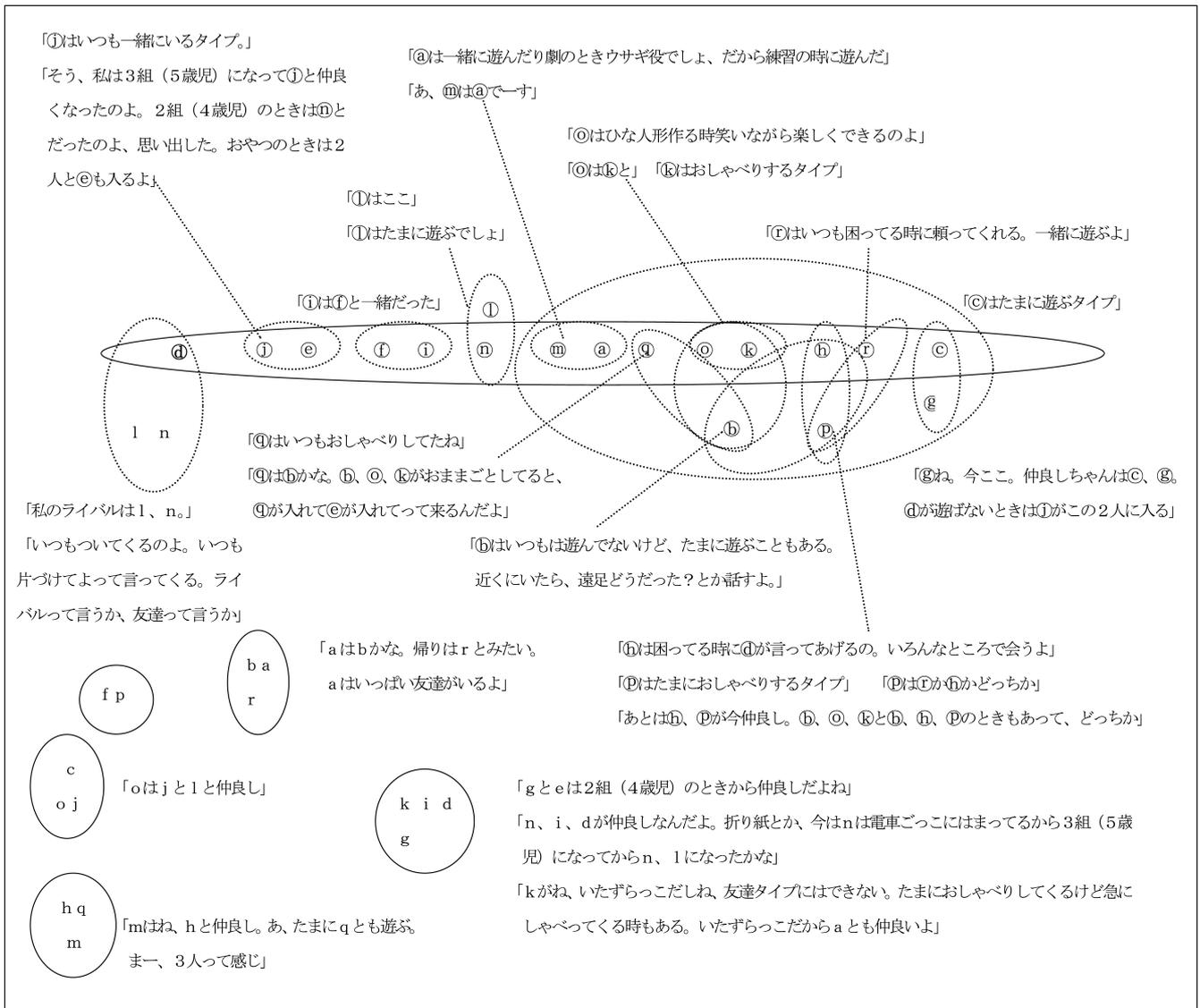


図3 抽出児④の捉えた「友達との関係」

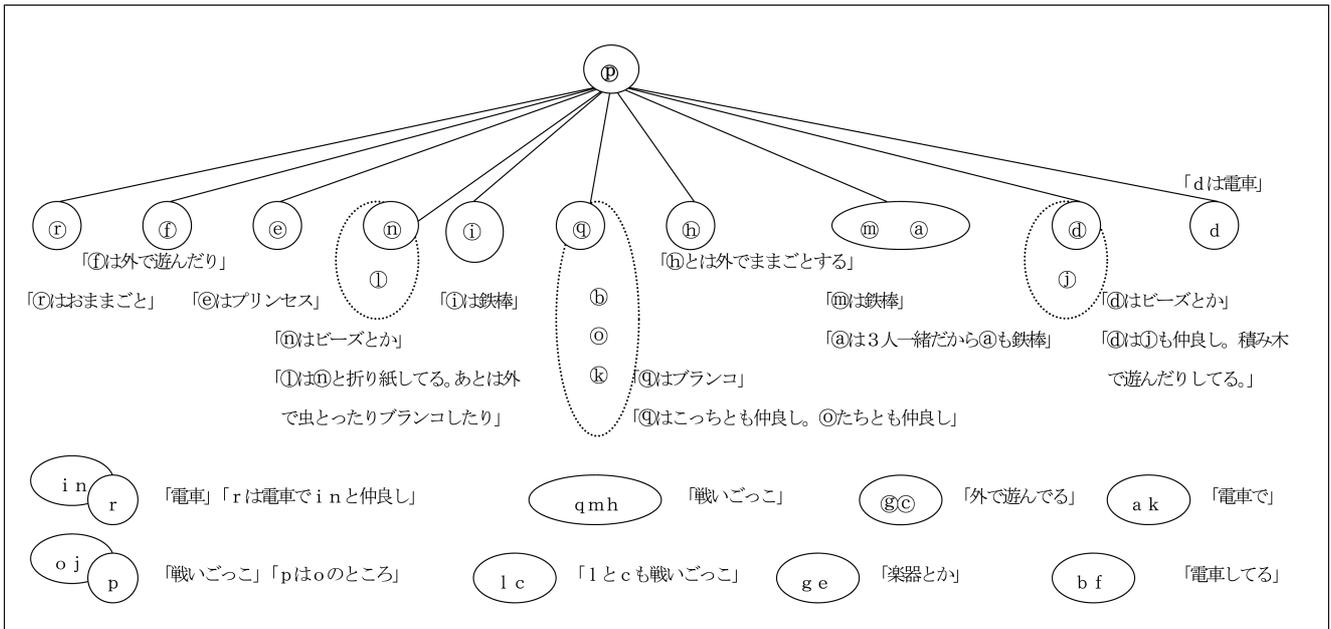


図4 抽出児㊦の捉えた「友達との関係」

(3) 事例3：学級全体の関係についての捉え方の違い  
 - 「仲の良い友達」以外の関係を知っている幼児-

㊱児は3月生まれ、㊲児は2月生まれであり、聞き取り調査では、両者とも、仲の良い友達以外の学級全体について、関係がわからないと答えた人数は0人であり、友達関係を全て答えている。しかし、同じくらいの月齢で、数字から見る結果が共通している場合であっても、実際の捉え方には差があった。

㊱児は、日常生活では、仲の良い友達と思っている相手とのかかわりが深く、その友達と楽しく遊ぼうと、全力で活動する姿があった。仲の良い友達以外の周りの友達を気にしながらすごしている様子はあまり感じられなかったが、聞き取りをしていく中では、驚くほど、周り

の友達を理解していることがわかった。「Cは他の人と遊びたがってるのに㊱が離さない」など、そのグループ内のかかわりの微妙な関係性まで把握していることが窺えた。

㊲児も㊱児と同様、関係がわからないと答えた人数は0人であった。しかし、調査の中で、仲の良い友達以外の周りの幼児の友達関係について、「遊んでそう」「どこか行ってそう」「何か作ってる」など、漠然とした捉え方の回答が目立った。さらに、仲の良い友達と㊲児が捉えたそれぞれのグループの括りは、他児が聞き取り調査の中で捉えた括りや、日常生活の中で教師が捉えている関係性とは、大きく異なる部分もあった。

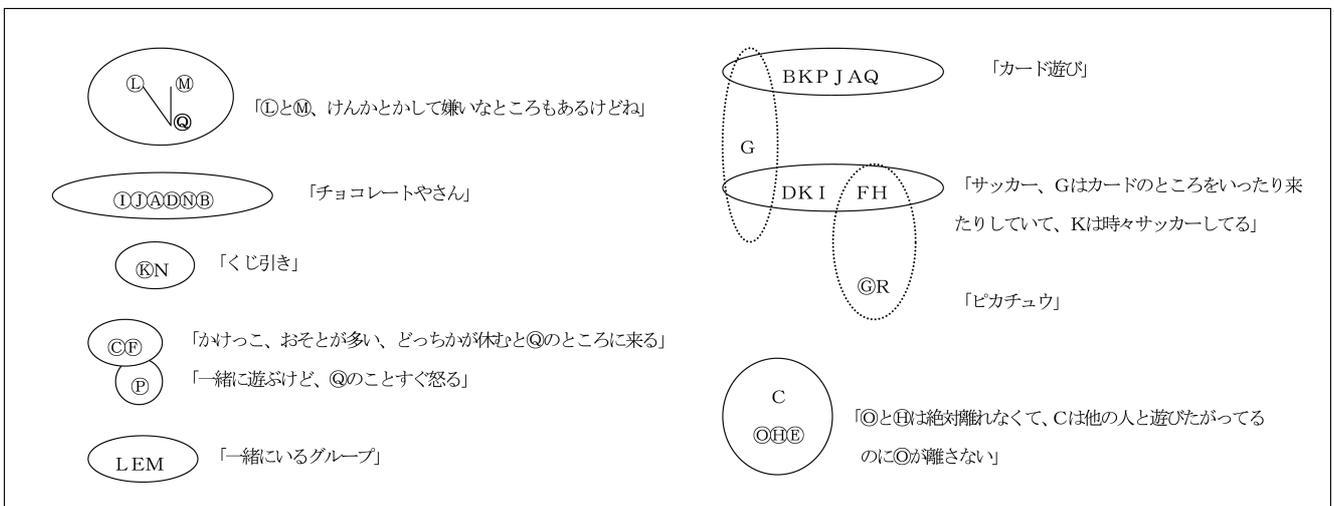


図5 抽出児㊱の捉えた「友達との関係」

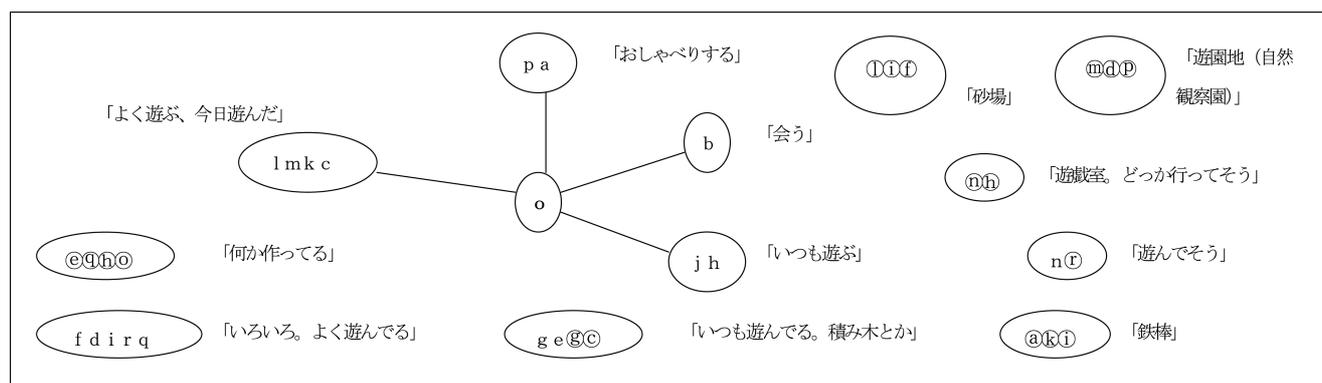


図6 抽出児oの捉えた「友達との関係」

## IV 全体考察

### 1 幼児の捉える「友達」

#### (1) 仲の良い友達の捉え方

今回の調査では、「仲の良い友達」の捉え方に関する傾向として、次のことがわかった。「仲の良い友達」と捉える人数は、最も少ない幼児で2人、最も多い幼児で14人、平均4.7人であった。仲の良い友達の捉えが互いに一致する程度は、平均すると6割程度であるが、全て一致する幼児もいれば、一致の程度が低い幼児もいた。仲の良い友達の人数が多い幼児は概してその程度が低くかった。

友達との関係をどのように築いているか大別すると、2つのタイプが考えられる。一つは、事例1のF児、I児のように、「仲の良い友達」は数人で、相手との一致の程度が高い幼児である。活動する際には、その友達と一緒にいることを重視することが多く、仲の良い友達としての関係をじっくりと深めていくことが可能になる。二つ目は、事例2のQ児、P児のように、「仲の良い友達」と捉える人数は多いが、相手との一致の程度はあまり高くない幼児である。活動する際には、まず自分が何をしたいかという興味を重視することが多く、そのとき興味の合う友達と一緒に遊びなどの面白さを共有していく。そのため必然的に、いろいろな友達とかかわる機会を多くもつことができる。ただし、特定の相手とじっくりかかわることは限られてくるため、相手に仲の良い友達と認識されにくいことが推察できる。

#### (2) 学級全体の関係の捉え方

調査では、仲の良い友達の捉え方とは別の視点として、学級内にいる幼児同士の関係について、幼児がどのように捉えているかについても検討した。全員について関係を捉えている幼児もいれば、学級の半数以上について関係がわからないという幼児もいた。その捉え方には、予想以上に個別の差異が見られた。例えば、事例1のI児は、仲の良い友達との関係を重視し、その結果、他の関係にあまり関心がない様子であった。事例1のF児や事例3のQ児は、仲の良い友達との関係を重視しながらも、その他の幼児とのかかわりをもっており、それぞれの関係を自分なりに捉えている。また、事例3のo児は、学

級全体の関係について把握していたが、他の幼児や日常的な教師の捉え方とは、やや異なった捉え方であった。抽出児の事例検討から、個々の生活・遊びへの取り組み方の違いが、学級全体の関係の捉え方の背景にあることが窺える。

### 2 保育内容「人間関係」における「友達」

本稿の冒頭で述べたように、保育内容として「人間関係」を考える際には、「友達」をどのように定義するか、また、「個人・グループ・学級全体」を保育の中でどのように繋げていくか考えていく必要がある。

まず、個人からグループへの繋がりについてである。先に述べたように、「仲の良い友達」との関係の築き方には、大きく2つのタイプがあった。個からグループになっていく過程が異なることをふまえ、それに応じた教師の援助が必要になる。数人の友達と一緒にいることが重視されるグループについては、その中での関係の深まりが期待できるが、遊びの興味が広がりにくい側面もある。この場合、新たな興味、関心が生まれるようなきっかけを、教師が投げかけていくことが求められよう。一方、活動への興味が重視される幼児については、その時々グループが成り立つことにより、関係の広がりが期待できる。反面、じっくりとグループの中で関係を深め、仲の良い友達となっていくことが生じにくい側面もある。このような場合には、関係を密にしていける状況をつくる必要がある。

次に、グループから学級全体への繋がりについてである。グループの中で友達との関係を構築していくことに加え、学級全体の関係に対する意識を高めていくこと、例えば、あるグループとグループの間に関係が生まれるような働きかけをすることなどが重要である。特に、今回の調査で、学級全体の関係の把握には、個人差が大きかった実態をふまえると、学級の全員に対して同じような働きかけをつくるだけでなく、個々の友達に対する関心の広がり方に応じた援助が必要になってくるだろう。

今後、今回の5歳児末の調査を基に、3歳児、4歳児、5歳児それぞれの時期によって、「友達」とはどのような関係であるかを再考し、さらに、その「友達」とのかか

わりをどのように築くかを検討することで、実際の保育に活かしていきたいと考えている。

### 3 今後の課題

本稿では、調査結果のうち主に全体の傾向を分析したため、個別の事例については、紙面の都合上もあり、十分な分析をするに至っていない。今後、個別の事例を分析する視点として、次の三点を挙げる。

第一に、「個・グループ・学級全体」の関連性を分析することである。今回、仲の良い友達の 致の程度は明らかにしたが、 致しない場合、相手はどのようにその幼児のことを捉えているのか、その関係についての検討は行っていない。双方の捉え方の違いを個々に分析していくことで、個からグループへの関連を見出したい。また、自分の仲の良い友達以外のグループをどのように捉えているかについて、対象児全員についての分析をすすめることで、グループから学級全体への関連を検討したい。

第二に、学級ごとの傾向の違いが、何に起因するものかを分析することである。調査では、仲の良い友達と捉えるグループの人数や、学級全体の関係の捉え方において、対象とした2学級に傾向の違いが見られた。いずれの学級も、筆者の 人が3歳児学級時と5歳児学級時に担任をしており、保育者の違いによるものとは考えにくい。日々の保育の記録等も合わせて個別の事例を検討したい。

第三に、月齢や集団保育経験の年数の違いが、友達との関係の築き方、捉え方にどのような差異をもたらしているかを分析することである。今回の調査対象児の月齢は、調査終了時で、6歳11ヶ月から6歳0ヶ月までの幅がある。また、3年間または2年間という保育経験の違いがある。入園前に別の保育所・幼稚園での集団保育経験がある幼児もいる。調査では、月齢が高い幼児、集団経験期間の長い幼児が、友達との関係をより把握しているという結果では、必ずしもなかった。月齢、集団保育経験年数の違いが、友達とのかかわりに全く影響しないとは考えにくい。今後の個別の事例検討によって、明らかにしたい点である。

#### 〈文献〉

- 1) 文部省「幼稚園教育要領」1956/1964改訂/1989改訂
- 2) 文部科学省「幼稚園教育要領」第2章一人間関係・内容及び内容の取り扱い 2008
- 3) 高濱裕子「幼児のプラン共有に保育者はどのようにかかわっているか」『発達心理学研究』第4巻 pp.51 59 1993
- 倉持清美「就学前児の遊び集団への仲間入り過程」『発達心理学研究』第5巻2号 pp.137 144 1994
- 高坂聡「幼稚園児のいざごに関する自然観察的研究：おもちゃを取るための方略の分類」『発達心理学研究』第7巻1号 pp.62 72 1996

- 松井愛奈「幼児の仲間への働きかけと遊び場面との関連」『教育心理学研究』第49巻3号 pp.285 294 2001
- 謝文慧・山崎晃「3, 4歳男児の友だち集団の特徴：個人行動及び二者関係と有意順位との関連」『発達心理学研究』第12巻1号 pp.24 35 2001
- 松井愛奈・無藤隆・門山睦「幼児の仲間との相互作用のきっかけ：幼稚園における自由遊び場面の検討」『発達心理学研究』第12巻3号 pp.195 205 2001
- 畠山美穂・山崎晃「自由遊び場面における幼児の攻撃行動の観察研究：攻撃性タイプと性・仲間グループ内地位との関連」『発達心理学研究』第13巻3号 pp.252 260 2002
- 4) 永野泉「保育内容『人間関係』に関する研究の動向」『淑徳短期大学研究紀要』第46号 pp.33 42 2007
  - 5) 前掲書2) 第1章-第1 幼稚園教育の基本
  - 6) 前掲書2) 第3章-第1 指導計画の作成に当たっての留意事項
  - 7) 倉橋惣三『幼稚園真諦』フレーベル新書10 フレーベル館 pp.111 114 1976
  - 原著『幼稚園保育法真諦』東洋図書 1934、筆者加筆整理し改題『幼稚園真諦』フレーベル館 1953
  - 8) 大場牧夫・大場幸夫・民秋言『新保育内容シリーズ 子どもと人間関係』萌文書林 p.103 1990/改訂版2000
  - 9) 同上書 p.108
  - 10) 文部省「幼稚園保育及設備規程」1899
  - 文部省「幼稚園令」1926
  - 文部省令「学校教育法施行規則」1947
  - 11) 文部科学省令「幼稚園設置基準」1956/最終改正2010
  - 12) 黒田成子「一クラスの人数は何人が適当か(幼稚園)」『幼児の教育』第66巻3号 pp.20 23 1967
  - 南信子「幼稚園の適正人数」『幼児の教育』第70巻1号 pp.14 17 1971
  - 山下俊郎「幼稚園の学級定員について考えよう」『幼児の教育』第79巻3号 pp.6 9 1980
  - 日本保育学会編『よりよい保育の条件』フレーベル館 1986
  - 荒井美保子「幼稚園・保育所における乳幼児の適正人数に関する研究」『愛知教育大学研究報告』第56輯(教育科学編) pp.33 36 2007
  - 13) 泉千勢・一見真理子・汐見稔幸編『未来への学力と日本の教育⑨：世界の幼児教育・保育改革と学力』明石書店 2008